

---

## 【特集】 ノンエリートの自立の現段階

---

### 特集にあたって

栗原 耕平

---

戦後日本の企業社会においては、学卒者が新規一括採用で企業に入社し、その後長期に雇用されつつ年功賃金を享受しながら労働者として陶冶されていくという自立の形が「社会標準」として広く定着した。それは「いい企業」に就職するための学歴競争や過酷な就職活動、もしくは企業内での昇進・昇格・昇給をめぐる労働者間競争など、激しい能力主義的競争に貫かれた自立の形であった。また女性については、そのような自立を達成した男性と結婚して養われることが標準視されていた。

そのようななか1990年代後半以降の労働市場の流動化は、非正規労働者や「周辺の正社員」など、年功賃金・長期雇用を享受できない労働者を大量に生み出し、企業社会の物質的基盤を大きく掘り崩した。その結果従来の標準的な自立を達成できない青年・労働者が大量に現れている。中西新太郎はこうした青年・労働者のライフコースを「逸脱」「非標準」として捉えるのではなく、もう1つの標準として捉える「第二標準」という概念を提唱した。これは彼ら／彼女らを、標準的な自立を達成できずに不安定な社会に翻弄される客体として理解するのではなく、不安定な社会のなかで独自の自立の形を模索する主体として捉えるものである。またそれと同時にそれらの青年・労働者の視点から従来の標準的な自立像を相対化し、新たな自立像とそれに即した社会制度の構築を展望するものでもあった。2009年に出版された中西新太郎・高山智樹編『ノンエリート青年の社会空間——働くこと、生きること、「大人になる」ということ』（大月書店）は、このような問題意識・枠組みを背景にしていた。

以上の中西の議論と響きあうのが、熊沢誠の『ノンエリートの自立——労働組合とはなにか』（有斐閣、1981年）である。本書で貫かれるのは、「ノンエリートの自立」とは、戦後日本の企業社会において「国民の常識」となった能力主義的競争を通じてではなく、平等主義的・反競争主義的な文化や規制によってこそ可能であるという問題意識である。これは当時まだ強固に定着していた企業社会における標準的自立像に対する批判であるとともに、能力主義的競争を受容し規制力を失った労働組合運動の復権を希求するものであった。

このように見てくると、学問分野や時代は異なるものの、中西の第二標準概念と熊沢のノンエリートの自立概念の背後にある問題意識は極めて近い。いずれも企業社会における標準的自立像とは異なる自立像を表現し捉えようとするものであるとともに、そのようなもう1つの自立を支える制度的運動的基盤の構築を展望するものであった。本特集ではこうした中西や熊沢の問題意識を背景にしつつ、現代のノンエリートの主体的な営みに即してその自立の形を模索するため、3つの論

文を掲載する。

小澤浩明「ノンエリートの自立と手に職・資格戦略」は生活困難層を対象とした調査を通じて、安定した職業獲得のために看護師や保育士などのケアワークの資格取得を目指す「手に職・資格戦略」をノンエリートの教育戦略の1つの類型として析出している。このような「手に職・資格戦略」の追求は特に母子世帯の母から娘に対して期待されており、その背景には娘が結婚・子育て後や離婚後も生活していけるよう「一生働くことのできる職の獲得を望む」母親の意識があるという。企業社会における標準的な自立像においては、技能養成は企業内でなされることが想定され、また女性は男性正社員に養われることが想定されていた。ノンエリート女性による「手に職・資格戦略」の追求は、企業外での技能の獲得を志向する点でも、男性に養われることを当然視しない点でも標準的な自立とは異なる自立への志向である。しかし企業内での技能養成が標準視されてきた日本では企業外での技能養成を支える制度が乏しいため、「手に職・資格戦略」を支えるための「職業的社会的公的保障」が提言されている。

谷川由佳「夜間定時制高校と移民青年——ノンエリート青年研究の視角から」は、移民青年の重要な進学先となっている夜間定時制高校の「独自の教育・ケア機能」を、教員へのインタビューを通じて検討している。インタビューからは、教員たちが、夜間定時制高校を、高等教育への進学を達成する場ではなく、様々な困難を抱えた生徒が卒業後の不安定な労働市場で生きていくために必要な力を身に着ける場として位置づけようとしていることがわかる。そこでは困難を抱えた生徒の包摂が重視されるとともに、例えば「生活リズム」や「労働を通じた学び」をもたらす学中のアルバイトが積極的に奨励される。進学する場合でも、それは「偏差値を基準にした学業達成というよりは、いわば労働市場に出る前の成熟のゆとりを得る場として認識されている」。いずれにしても従来の標準的な自立像は目指されるべきものとして位置づけられていない。移民青年の自立の課題はこのような日本人生徒と共通する枠組みの中で対応され、日本語能力などその固有の課題は生徒が抱える様々な困難の1つとして対応されている。また定時制高校にとっての「2つの“外部”」という指摘も重要である。すなわち家庭・経済・入管制度などの「外部」や「卒業後の世界」という「外部」において発生する問題は教員による対応が困難なものであるが、しかし「外部」の制度・機関が極めて脆弱な中で、「学校への課題の過剰集中」が生じ、教員たちが葛藤や困難を抱えざるを得ない状況が生じているのである。谷川論文では、夜間定時制高校が果たしている機能とその限界（=外部）の検討を通じて、必ずしも移民青年に限定されないノンエリートの自立の課題が浮き彫りにされていると言えよう。

杉田真衣「40歳になった高卒女性の現状から見る日本社会の課題」では、杉田自身が『高卒女性の12年——不安定な労働、ゆるやかなつながり』（2015年、大月書店）でそのライフコースを分析した4人の女性のうちの3人について、その後のライフコースを辿っている。そこから浮かび上がるのは標準的な自立像からかけ離れた労働・生活の実態である。シフト削減や失業を経ながら非正規労働を続け、また正社員であっても年功的な賃金上昇はなされていない。結婚はしておらず、友人関係も希薄化している。「社会的孤立」の「いっそうの深化」が生じており、「死っていうものはもう目標」との語りも現れている。死が目標になるほどの深刻な社会的孤立を生きる彼女たちの自立はいかにして可能なのか。標準的な自立像が前提とする能力主義的競争に貫かれた正社員労働や

結婚を通じた男性への依存は彼女たちにとって自立の目標にはなっていない。とはいえ、別様の自立の形が彼女たちにとってリアルなものとして存在するわけでもない。こうした「第二標準という社会標準自体が成り立ち難い状況」は、翻って平等主義的で反競争主義的な制度や規制によって「第二標準を標準として機能させる必要<sup>(1)</sup>」を切実に示しているように思われる。

1990年代後半以降の社会の大きな変動の中で、従来の標準的な自立を支える物質的基盤が大幅に縮小し、それとは異なるもう1つの自立の形すなわち第二標準が現れつつある。しかし依然として第二標準を支える制度的基盤は乏しく、ノンエリートは深刻な困難を抱えざるを得ない。本特集の3つの論文は、いずれもこうしたノンエリートの自立の現段階とそこにはらまれた課題を鋭く問題提起するものとなっている。ぜひご一読いただきたい。

最後に、労働組合論を専門とする筆者からすれば、今回の特集論文全体を通じてノンエリートの自立を支える存在として労働組合がほとんど現れてこないことを問題視せざるを得ない。むしろそれは論文執筆者たちの責任ではない。ノンエリートの自立を支えられる質と規模を備えた労働組合運動の不在ゆえである。第二標準を生きるノンエリートの自立と労働組合運動との理論的・実践的接続は、筆者も含めた労働組合の実践家や研究者の1つの大きな課題であろう。

(くりはら・こうへい 専修大学経済学部助教)

---

(1) 中西新太郎「青年層の現実に即して社会的自立像を組みかえる——安心して生き働ける最低限の保障を」佐藤洋作・平塚眞樹編著『ニート・フリーターと学力』明石書店、2005年、246頁。